

米田知子 「アルベール・カミュとの対話」

2019年4月13日(土) – 5月25日(土)



米田知子, *Entwined - Trees in the middle of a former trench at the Battle of the Marne*
2017, Chromogenic print

創造は統一の要求であり、世界の拒絶である。しかし創造が世界を拒絶するのは世界に何か欠けるところがあるからであり、時として、あるがままのものの資格で世界を拒絶するのである。ここに置いて反抗は、歴史の外で、そして純粋な状態で当初の複雑さのなかで観察されうる。したがって、芸術は反抗の内実に関して最後の展望をわれわれに与えてくれることになるはずである。

アルベール・カミュ「反抗的人間」より

アルベール・カミュ（1913–1960）は、仏領アルジェリアに生まれ、20世紀の激動の時代の狭間に生きた。彼は著作を通じて、人間が遭遇する不条理の宿命を直視し、真の反抗や正義の意味、人間の共存とは何かを問い合わせた。人間は平等の光と自然の恩恵を受け、自由を享受すべく存在し、暴力と権威を排除した生の尊厳を訴え、また苦悩する。

私はカミュが息づき、創造と葛藤の地となった二つの故郷——アルジェリアとフランスを訪ね、人々との対話を通じて、先の時代の出来事と今再び世界を包み込む世界の黒い影を作品で応答し、普遍的な輝く愛を問い合わせ、人間——その”存在”的ことを考える糧にできればと思った。

制作のきっかけにはカミュの『犠牲者でもなく執行人でもなく』というエッセイがある。これは戦後まもなく

く 1946 年にカミュが編集長を務める仏レジスタンス紙『コンバ』に数日間に渡り掲載された。原爆投下に象徴された科学進歩による人間の生の否定と（地球規模の）未来（へ）の破壊、目的達成にはいかなる手段をも正当化させるイデオロギーと暴力への批判——「直接的にも間接的にも——あなたは殺されたいですか、または、殺人者になりたいですか」もしいずれかの回答に”否”であるのならば、命を剥奪し沈黙を強いる世界に疑問を持ち”否”と言えるべきだとカミュは訴える。カミュが生きた時代、また時代を経て繰り返されてきた暴力と戦いは、われわれをより豊かな、平和の時代と導いてきたのであろうか。人類のこの果てしない課題は現在の混沌した世界状況の中、カミュの作品と生き方を軸に「人間の存在と愛」の根本的意味を考えることの重大さを感じ、作品を通じて、幅広く皆さんと対話が出来ればと思う。

米田知子

あらゆる人、あらゆる場所にはその人やその場所固有の記憶、歴史があります。

ロンドンをベースに仕事を続ける写真家米田知子の制作はリサーチから始まります。彼女の大事な仕事場の一つが大英図書館であるように、関心対象の入念な調査ののち、歴史上の人物の記憶、あるいは歴史的な記憶が強く残る場所を訪れ写真にとどめることによってその真実に迫っていく独特の手法は、白黒写真においてもカラー写真においても今日性を伴った知的な冴えが光る、エレガントな作品群として評価されてきました。

米田がこれまでに訪れた場所には目をみはるものがあります。

ソ連崩壊直前に独立を遂げたエストニア、ソ連崩壊後欧州連合 EU に帰属したハンガリー（「雪解けのあとに」2004 年）、米田の郷里であり阪神淡路大震災で壊滅的な被害を受けた阪神地区（「震災から 10 年」1995/2004 年）、レジスタンスの秘かな拠点だったイタリアの工場地区（「The city rises」2006 年）、二つのキリスト教コミュニティに分断された北アイルランド（「One plus one」2007 年）、ゾルゲとその仲間たちの調書に記された日本各地の密会場所（「パラレルライフ」2008 年）、独立運動の軌跡を辿ったバングラデシュ（「Rivers become oceans」2008 年）、旧大日本帝国時代の病院がやがて軍隊内警察の本部となったソウルの建物（「Kimusa」2009 年）、台北各所に残存している日本占領統治時代の日本風家屋（「Japanese House」2010 年）、東日本大震災を軸に日本人の近代の傷と記憶の再考する要となる福島、広島、東京（「積雲」2011-12 年）、ロシアと日本に分割統治されていた北方の島（「サハリン島」2012 年）、朝鮮半島を二分する非武装地帯（「DMZ」2015 年）。

以上のシリーズはいずれも自らその地を訪れ撮影をしたもので、あるいは 1998 年から続く「シーン」シリーズではアジアをはじめ、ヨーロッパ、中東を訪れ、目の前に広がる穏やかな景色の中には現れない、その場所に刻まれた歴史的事実とそこに生きる人々の記憶を作品に結実させてきました。

今回の展覧会で披露されるのは『異邦人』『ペスト』など 20 世紀を代表する小説を著したカミュの軌跡を辿った「アルベール・カミュとの対話」（2017-18 年）です。

1913 年仏領アルジェリアでヨーロッパからの入植者の家系に生まれたカミュは、二つの世界大戦、フランスの植民地政策を背景とした移民差別や政治問題、アルジェリア独立戦争など多くの苦難に翻弄されながら混沌とした時代を生き、暴力に満ちた不条理な世界で我々はどうあるべきかという主題を著作のなかで繰り返し追求しました。米田はカミュの著作や時代背景、彼の生き方を再考することの重大さを感じ、彼の足跡を辿るべくアルジェリアとフランスに向かいます。第一次世界大戦下の 1914 年に本国フランスで戦死したカミュの父を起点に、アルジェやティバサ、マルセイユ、パリなどを訪れ、カミュが見た世界に自らの眼差しを重ね合わせていきました。第二次世界大戦後に発表されたカミュのエッセイ『Neither Victims nor Executioners』（本

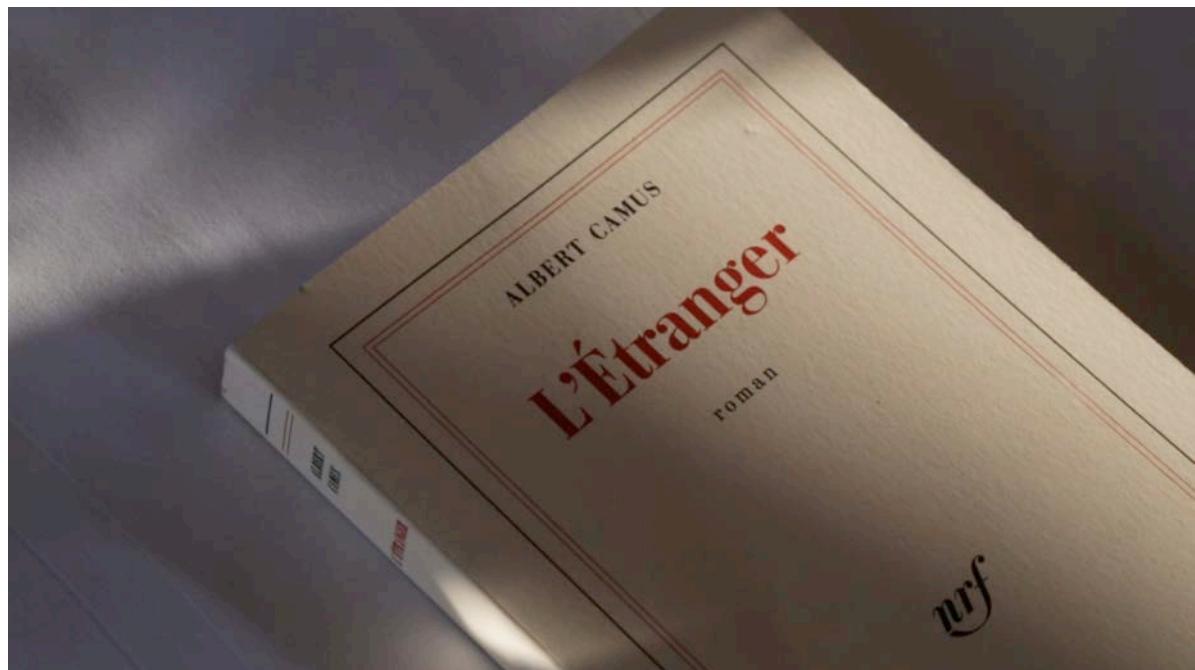
邦未訳)には、”犠牲者でもなく処刑者でもない何者かであること”という意思表明が記され、それから半世紀以上経つ今日の世界でこそ吟味すべき問い合わせだという米田の思いがこの展覧会に込められています。

本シリーズは 2018 年春にフランスのパリ日本文化会館で開催された展示を皮切りに、上海ビエンナーレ(2018-19)での展示を経て、東京での初披露となります。当シリーズから本展覧会のために再構成された作品群、並びにフィンランドを代表する現代音楽家トミ・ライサネンのサウンドインスタレーションを組み込んだ映像作品を展示します。アマナサルトの協力を得て実現したプラチナプリント作品『友への手紙』(2017-18)も併せて発表いたします。

今展覧会は、パリ日本文化会館、並びに同地での展示のキュレーションと調査協力に尽力をされた岡部あおみ先生のご厚意で実現するものです。この場を借りて深く御礼を申し上げます。オープニングの 4月13日には岡部あおみ先生と米田との対談が実現の運びとなりました。

また 2020 年にマドリッドのマフレ財団で予定されている個展に合わせて、米田にとって初の包括的な写真集が出版される予定です。今後の米田の活動にますますご注目いただき、貴媒体にて本展をご喧伝いただければ幸いです。

2019 年 3月 シュウゴアーツ



米田知子, *Dialogue with...*, 2018, Single Channel video installation (HD, colour, sound), 6 min.7sec
Music and sound installation by Tomi Räisänen

米田知子は 1965 年兵庫県生まれ、ロンドン在住。1991 年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(ロンドン)修士課程修了。記憶と歴史をテーマに作品制作を続ける。主な展覧会に第 12 回上海ビエンナーレ(2018-19)、「アルベール・カミュとの対話」パリ日本文化会館(2018)、「ふぞろいなハーモニー」広島市現代美術館(2015) / Kuandu Museum of Fine Arts(2016)、光州ビエンナーレ(2014)、あいちトリエンナーレ(2013)、「暗なきところで逢えれば」姫路市立美術館(2014) / 東京都写真美術館 (2013)、「Japanese House」シュウゴアーツ(2011)、「終わりは始まり」原美術館(2008)、第 52 回ヴェネチア・ビエンナーレ(2007)、「震災から 10 年」芦屋市立美術館博物館(2005)、「記憶と不確実さの彼方」資生堂ギャラリー(2003)。

展覧会概要

米田知子「アルベール・カミュとの対話」

会期: 2019年4月13日(土)–5月25日(土) *祝日休廊: 4月28日(日)–5月6日(月)

会場: シュウゴアーツ 106-0032 東京都港区六本木6丁目5番24号 complex665 2F

開廊時間: 火～土曜 午前11時 – 午後7時 (日月祝休廊)

オープニングパーティー: 4月13日(土) 午後6時より

オープニングトーク: 4月13日(土) 午後4時より シュウゴアーツにて (入場無料)

米田知子 × 岡部あおみ (美術評論家、パリ日本文化会館展示部門アーティスティック・ディレクター)

予約制: event@shugoarts.com まで要予約。定員に達し次第応募締切。

岡部あおみ

武蔵野美術大学芸術文化学科教授、ニューヨーク大学客員研究員などを経て、2014年より国際交流基金・パリ日本文化会館アーティスティック・ディレクター(展示部門)、2018年より上野文化の杜新構想実行委員会国際部門ディレクター。「前衛芸術の日本 1910 - 1970」(1986年パリ・ポンピドゥーセンター/コ・コミッショナー)、「ジョルジュ・ルース阪神アートプロジェクト」(1995年)、「ジョルジュ・ルース in 宮城」(2013年)他、パリ日本文化会館では「真鍋大度+石橋素」展、「内藤礼」展、「米田知子」展、上野文化の杜では「ホセ・マリア・シシリア」展のキュレーターを務める。



米田知子, *A statue in a pond and sky seen through palm trees. Botanical Garden of Hamma, Algiers, Algeria*
2017, Set of ten platinum and palladium prints with box

本展覧会の作品は国際交流基金/パリ日本文化会館における『『トランスフィア(超域)』#5 『米田知子 アルベール・カミュとの対話』』展のために制作されました。

 **amanasalto**

ShugoArts シュウゴアーツ 106-0032 東京都港区六本木6丁目5番24号 complex665 2F

掲載用画像の貸出し・お問い合わせ プレス担当: 小澤樹生 / 03-6447-2234 / nayuta@shugoarts.com